

「大阪国際大学「ひと・まち・であう」プロジェクトチーム政策提案内容」

大阪国際大学

「ひと・まち・であう」プロジェクト 親衛部隊

<問題の認識>

我々は「大都市近郊における魅力あるまちづくり」というテーマに基づき、京田辺市は新興住宅地域が増加し、「ベッドタウン化」しており、「自治会活動や近所づきあいが疎かになっているのではないか?」、また、旧村地域との「自治会活動や近所づきあい」の格差があるのではないかという仮説を立てた。

すなわち、まちが都市化され便利にはなったが、人との繋がりが疎かになっている様な問題を引き起こしている「コンビニ社会」という言葉に落ち着いた。

昔：人の繋がりが>便利

今：人の繋がりが<便利

<問題の裏付け ～地域のフィールドワークから～>

これを裏付けるため、自治会(区)・行政・住民へ調査を行った結果、

- ◎自治会(区)：4つの自治会(天王・二又・興戸・田辺)に話を伺いにいったところ、自治会(区)の加入率も高く、「向こう3軒両隣」の様に、お互い助け合い、力を注いで活動(地蔵盆や運動会等)しているが、新興住宅地域と旧村地域の双方が存在する地域(二又・田辺)では、ゴミの出し方のルールを守らない等、意見の食い違いが生じている。
- ◎行政：現場に赴き、自治会(区)との連携を密にしたいと考えており、住民の要望を取りまとめるためや、広報の配布等で欠かせないパートナーである。
- ◎住民：4つの地域(京田辺駅周辺・松井山手・普賢寺・三山木)でヒアリング調査を行ったところ、新興住宅地域及び旧村地域は双方とも自治会活動や近所づきあいは行っているが、地域を超えた交流は行っていない。

<問題の定式化>

「コンビニ社会」という、コンビニエンスストアの様に便利であるが、個人商店の様な繋がりが無いということを「比喩」として用い仮説を立てたが、フィールドワークを行った結果、双方とも自治会内での活動や近所づきあいは行っており、格差があるとは言えなかった。

しかし、フィールドワークを行う中で、新興住宅地域と旧村地域とのつきあいは、自治会と住民共通して、否定的な答えが返ってきた。

つまり、京田辺市が抱えている問題とは、**新興住宅地域と旧村地域との人の繋がりが**であると気づいた。

<政策提案>

我々は、「新興住宅地域と旧村地域の人の繋がりを」を目的として定め、新興住宅地域と旧村地域の住民や特産物である「筍」を資源として、旧村地域の歴史が継承され、京田辺市としての新たな文化が芽生えていく、魅力あるまちを目指すものとする。

1, ～新しい「まち」へ～

まず、自治会活動をベースとするものの、地蔵盆や運動会等、**地域住民のほとんどが参加する行事**においては、**小学校区単位で行う**ことで、新興住宅地域と旧村地域の人の繋がりが構築でき、人口が減少している地域においては、負担の軽減ができる。**(22自治会(区)から9学区へ)**

⇒これは、自治会(区)を超えたものであるため、行政が協力すべきであろうと考える

2, ～京田辺からの「協・多・鍋」～

次に、力を注いでいる運動会の場で、京田辺からの「協・多・鍋」を大鍋でつくる。

⇒「鍋」・・・様々な食材を入れることにより、新たな料理が出来る。

・この「協・多・鍋」は、京田辺市の**特産物である「筍」や「茄子」地域で採れた野菜**などを利用する。

⇒例えば、運動会を5月に行うことにより、「筍」を用いることができる。

・住民の殆どが参加する運動会において、「協・多・鍋」を大鍋で行うことで、災害時の炊き出しの場合に役に立ち、**防災訓練**にもなり、自分達で地域を守っていかなければならないという心も芽生える。

すなわち、**新興住宅地域と旧村地域の住民という資源を調和**させることにより、**旧村地域の歴史が継承**され、京田辺市としての**新たな文化が芽生えてくる**。

⇒京田辺市が目指している都市像の「**文化田園都市**」とも合致する。

3, ～国際化に向けた「まち」へ～

「自分が参加していいのかな？」と疑問を持っている外国人を巻き込むために、招待状を送る代わりに「**竹製の箸**」を送り、鍋という日本の文化を身近に感じてもらい、**国際的なまち**を目指す。

※天王区に住む久保さんという方が、24もの**茶筌**の工程をすべてこなせる府下唯一の職人。

⇒市長がおっしゃっていた、「国際化に向けたまちへ」とも合致する。

<将来への展望>

現在、「どうあるべきか」と悩んでいる、商工会と農協が行っている「産業祭」へ、それぞれの9小学校区で獲れた食材を使った「協・多・鍋」を出品し「地域性」「独創性」「味」で競い合い、その年の一番を決める「鍋1グランプリ」を開催する。

また、このことは、産業祭の主旨である、「**地産地消**」というところにリンクし、それぞれの地域の特性に応じて「協・多・鍋」を煮詰めることが可能であろう。